



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.90

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2016年7月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

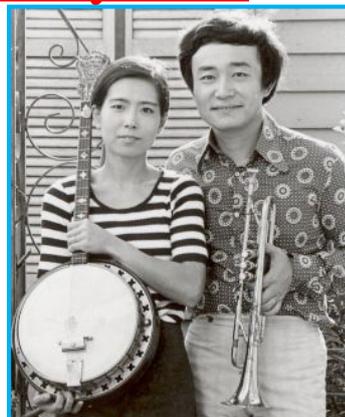
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

Congratulations!

The Golden Wedding Anniversary of the Toyamas



**「サッチモとJAZZ
と私たち」の50年**



外山喜雄・恵子“夫婦でジャズ”総決算の年

横浜—長野—蓼科—御茶ノ水…そして、再びニューオリンズへ

外山喜雄・恵子夫妻が結婚したのは、1966年(昭和41年)5月…ということは、今年で結婚50年の「金婚式」を迎えたことになる。夫妻の周囲から「ウォ！」「いやあ、おめでとうございます」の祝福の声が相次ぐ。サッチモとジャズ一筋に活動を続けてきたオシドリ夫妻が、その声に応じて始めた今年のテーマは『夫婦でジャズ50年』。ジャズとサッチモに献じた半世紀を2人でしっかり振り返ってみようということだった。その第1弾が5月23日から始まった横浜のジャズ喫茶「ちぐさ」での4回シリーズ「ちぐさdeジャズ探検隊」。次いでデキシシーセインツとともに長野市に飛んでの「2016NAGANO門前ジャズストリート」(同28日)、さらには翌日、長野・茅野市の蓼科高原ペンションでの「ライブコンサート」。決定版は東京・お茶ノ水、アテネ・フランセ文化センターでの久々の開催、第60回例会「サッチモとジャズと私たち」。目まぐるしく各種イベントをこなして8月、外山夫妻は今年も“原点”のニューオリンズへと旅発つ。(小泉良夫)



ニューオリンズ・ラスカルズの木村陽一さん(ds)を交えて例会で演奏する外山喜雄とデキシシーセインツ

発売中！「ジャズ批評」7月号でも夫妻のロングインタビュー
150人が馳せ参じ大盛況となった第60回例会
 新装なった御茶ノ水のアテネ・フランセ文化センターで久々の開催

7月2日(土)、すっかり新装なった御茶ノ水のアテネ・フランセ文化センター、4階ホールでの久々の開催。奇しくも例会は60回目。それに外山喜雄・恵子夫妻の結婚50周年「金婚式」のお祝いを兼ねての“夫婦でジャズ50年”。テーマは『サッチモとJAZZと私たち』。参加150人超で満杯となった会場には、この50年、ご夫妻とゆかりのある方々が大挙して祝福に駆け付け、記念すべき会報90号を飾るにふさわしい素晴らしいイベントとなった。

夫妻が見た憧れの地ニューオリンズの映像や『サッチモは世界を廻る』ノーカット版、初公開

午後2時開演、まずは夫妻のこの50年の思い出。1967年12月30日、横浜から移民船「ぶらじる丸」で渡米した2人。ロサンゼルスについて、ジャズファンのお宅で歓待していただいたあと、いよいよニューオリンズ入り。そこで待っていたものは…？ このあたりは、先の横浜「ちぐさ」での、



山口義憲さん(会報「ワンダフルワールド通信」編集長)の軽妙な司会で外山夫妻50年の幕開け

トークを重点に企画されたイベント(5面に詳報)とダブルなので、そちらにお任せするとして、まずは夫妻が見たあこがれの地、ニューオリンズのドキュメンタリーフィルム『On the Road Again』(1963年)。当時の現地のジャズ葬式、ジョージ・ルイスの映像も流され、もうみなさん、ニューオリンズへしっかりと足を踏み入れていく。

この後、引き続き映像が流される。米CBSテレビのドキュメンタリー・クルーが密着取材した『サッチモは世界を廻る(原題=Satchmo the Great)』(1956年)。WJF会員でテレビディレクターの柿崎拓哉さんと小高隆幸さんのご尽力で全編65分を鮮明にデジタル化し、外山喜雄さんが本邦初の簡潔な日本語字幕を挿入している。解説のナ



こんにちは
ミスター・アームストロング

レーションはCBSのドキュメンタリー・シリーズ『See It Now』の名キャスター、エドワード・R・マロー氏。

もう何度も会報で紹介させていただいているので、あらすじなどは割愛させていただいたが、今回は何とんでも全編65分のノーカット版、初公開(写真)。これに改めて感動し、サッチモの偉大さに魅せられた方々も少なくないはず。「素晴らしかった」「感動しま



した」…終わっての懇親会の席上、そんな声が次々と寄せられた。

サッチモが独立間近に控えたアフリカのガーナを訪れ、大統領となるエンクルマ氏の前で『ブラック・アンド・ブルー』を歌うシーンや、出迎えたファンが10万人というのもすごい。そこでの躍りを見てサッチモが「あれはうちの母が踊っていたのと同じだ」といって、ルーツがここであることを確信したというシーンも映し出された。

サッチモがアフリカの小学校で子供たちにト

ランペットをプレゼントする場面が出てくるが、これこそ若き日の外山夫妻を感動させ、現在も続いているWJFの楽器プレゼント活動の原点となっているシーン。

そして、何度見ても感動させられるのが、アフリカから帰国後の1956年7月14日夜、レナード・バーンスタイン指揮、ニューヨークフィルの88人からなる交響楽団と演奏する『セントルイス・ブルース』。

サッチモの生涯の夢の一つだったという。聴衆の中には83歳ですでに盲目となっていたこの曲の作曲家、W. C. ハンディも姿見せ、何度も大写しにされて、ハンカチで涙をぬぐうシーンも。

先ごろ『ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話』(DU BOOKS)を上梓されたWJF初期からの会員、中村宏さん(医学博士、ジャズ評論家)が同書の中でも触れているが、「映画の中に出てくるセントルイス・ブルースは何度聴いても感激して涙が出てくる」と。

また、この映画の中、バーンスタインが演奏のあと、聴衆に向かって話しかけた言葉は、外山さんが何度も紹介して、会報で何度も書いてきたが、サッチモに関して語りつくせないものがある。またまた書かせていただく。

「私たちの演奏したセントルイス・ブルースはルイ・アームストロングの演奏をまねてやった、大げさな模倣にすぎません。彼の演奏こそ、

リアルで真実に満ち、正直で、シンプルで気高きさであるのです。彼がトランペットを唇に当てるとき、たとえそれが練習のための一節であっても、そこにはすべての魂が打ち込まれているのです。彼こそ音楽にすべてを捧げた人



物であり、私たちこそ彼と演奏できたことを光榮に思っているのです」

夫妻の人生そのものとなった映画『五つの銅貨』 5歳の長男、洋一君と『デキシワンダーランド』

休憩に入り、第2部は、夫妻がジャズに憧れたモチーフでもある映画の一つ、『五つの銅貨』(1959年)の印象的な場面が流れる。ダニー・ケイ扮するレッド・ニコルスと子役のスーザン・ゴードン、それにサッチモの3重奏(写真左)。



『デキシワンダーランド』(1981年6～7月)。外山さんと当時5歳

の長男、洋一君のデュエット。サッチモ風イラストと子供が躍るアニメーションが入る(写真左下段)。会場を微笑みが満ちた。ここでジャズ評論家、岡崎正通さん、セインツ・ファンの高橋良子さんから夫妻に花束が贈られた(写真上)。

ニューオリンズ・ラスカルズの木村陽一さんを迎えて サー・チャールスにも捧げるセインツならではの熱演

いよいよ外山喜雄とデキシシーセインツの演奏に入る。出演は、外山喜雄(tp, vo)、外山恵子(p.bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、それに、今回は外山夫妻の大先輩の特別出演、あのニューオリンズ・ラスカルズの木村陽一(ds,vo)。大阪からはるばる応援に来ていただいた。

曲は、『ワイルドマン・ブルース』に始まり、先日98歳で亡くなったサー・チャールス・トンプソンさん(11面に関連記事)に捧げて『マギー、二人が若かりし頃』、恵子さんと藤崎さんの絶妙なデュエット『ピーター



新装なったアテネ・フランセ文化センター 4階ホールは満員のお客さんで埋め尽くされた

ー・パンサー・パター』(次ページ写真①)、ドラムに木村さんのご子息、純土さんが入り、陽一さんは、なんと外山さんとデュエットでユーモラスにのどを聴かせた『ロッキン・チェア一』(写真②)、恵子さんはバンジョーで外山さんと可愛らし

く？歌も入れて『アイスクリーム』(写真③)。これこそ典型的な“おしどり夫婦”の共演。長かったような、短かったような夫妻の50年を締めくくったのでした。

閉会後の懇親会もゆかりのみなさんで超満員「ジャズ批評」の記事も夫妻の50年を称える

閉会后、午後5時からアテネ・フランセB1のリアサントウ

イチカフェで懇親会。イベント会場に来られていた方々ほぼ全員が参加するといった大盛況。

それもそのはずで、早稲田ニューオリ関係、ジャズ関係、WJF会員、「サッチモの旅」同窓生…まさに外山夫妻と切っても切れないご縁のある皆様ばかり。その方々が、

外山さんに次々と前に呼び出されて、とっておきの“秘話”を披露、危ない？質問まで飛び出す始末。おかげでビールやワインの売れ行きも順調だったようです。恵子さん、広津さん、藤崎さんトリオの演奏もあって、午後6時半やっとお開き。

この日、いま発売中の『ジャズ批評』(No. 192 7月号) =写真下=が、会場で販売された。「ベスト・オブ・トランペット 50」(レジェンドから新進気鋭までトランペッター50名を紹介)で、外山さんも当然選ばれているが、そのロングインタビュー特集では、「夫婦でジャズ、夫婦でサッチモ、夫婦でニューオリンズ50年(笑)」として7ページにもわたって外山喜雄・恵子夫妻が紹介されている。会場に20冊が遠慮深げに持ち込まれたが、即完売してしまい、買いそびれてしまった方も少なくなかった。会場には、ジャズ批評社の松坂ゆう子専務、インタビューを担当した、星向紀さんも来られていたが、星さんは編集後記に「ジャズに興味を持つきっかけは、ディズニーランドで聴いた外

山さんの演奏でした」と書かれていて、夫妻は大感激。それにしてもこの号は、サッチモも真っ先に取り上げられていて、外山夫妻の50年を彩る素晴らしい企画にあふれている。外山夫妻の新しい門出の第1歩でもあるに違いない。アテネ・フランセの会場には日本のジャズ評論界をリードする評論家の皆様、瀬川昌久、岡崎正通、後藤雅洋、小

針俊郎、中川ヨウ、青野浩史の各氏、横浜でジャズをリードする横浜ちぐさ会、藤澤智晴氏ほかの皆様、朝日新聞、時事通信からもご出席が

あり、ルイ・アームストロングの世界が日本でも拡がりを見せ始めていることを予感させるものだった。湯川れい



子さんからは素敵なフラワースタンドも(写真上段右)。私たちWJF会員も夫妻への支援をいつまでも続けて行きたいですね。

(小泉良夫)

早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ「ニューオリ祭」でも活躍の外山夫妻

6月、来年創部60周年を迎える早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ「ニューオリ祭」が大学構内で開催され、OBOGを主体に約150名が相集いました。楽器持参の卒業生による、各世代の10バンド+現役バンドがニューオリンズジャズを演奏、学生時代より腕があがった演奏ぶりに大きな拍手が沸きました。

フィナーレは卒業生でプロミュージシャンの演奏、1曲目は、わがWJFの会長、外山喜雄さんのトランペットが朗々と鳴り響いて『ワイルドマン・ブルース』。バンドメンバーはホット7仕様で、バンジョーは外山恵子さん。この日、初めての編成でしたが、息も合ってすばらしい演奏です。恵子さんのバンジョーソロで『世界は日の出を待っている』に場内大盛り上がり。『聖者の行進』ではバンドの場内パレードにセカンド・ラインが列を作って踊りだす、ニューオリの原点、心のふるさと、われらが母校！のヨロコビにあふれたニューオリ祭でした。

(山口義憲)

横浜のジャズ喫茶ちぐさ+HANAHANAで5~8月4回シリーズ
外山喜雄・恵子の夫婦でジャズ50年「ニューオリンズの日々」でスタート
ちぐさdeジャズ探検隊特別編「ジャズメンが語るジャズの歴史シリーズ」第1弾

5月23日(月)、ジャズ喫茶ちぐさ(横浜市中区)には、午後2時開演の1時間以上前から熱心なファンが詰めかけていた同店ご自慢の音響装置からLPのジャズが流されていた。最高のサウンド。皆さんすでにジャズ談義に花を咲かせている。

普段の月曜日は、ちぐさの定休日だが、このような特別なイベントに限って、ボランティアスタッフの皆さんの手で“マンデーちぐさ”として開店している。今回の「ちぐさdeジャズ探検隊」特別編のテーマは、ジャズメンが語るジャズの歴史講座シリーズ第1弾

『夫婦でジャズ50年~ジャズの故郷ニューオリンズの日々』。

ボランティアスタッフ山口誠之さんの司会で開演。この山口さんもスタッフとともにWJF60回例会にお出でになっていた。

サッチモとジャズ、そしてニューオリンズに魅せられた2人が、横浜港山下埠頭から移民船「ぶらじ丸」で日本を離れたのは、結婚の翌1967年12月。「ここ横浜に来てポーッ!という汽笛の音を聞くと、ああ、ここはアメリカに通じているという実感が湧いてくるんです」と外山夫妻。プロジェクターでスクリーンに夫妻の出航風景が次々と映し出される。

**サッチモとジャズが生まれた町はどんな町？
あつという間に全世界に広まったのはなぜ？**

「サッチモが生まれた町、ニューオリンズはどんな町だったのか？ なぜジャズがニューオリンズで生まれたのか？そして、それがあつという間に全世界に広まっていったのは、どうしてなんだろう？ そう思うともう、居ても立ってもいられなくなって…」

『ハロー・ドーリー!』など、ベトナム戦争の最前線に向かう兵士たちの前で歌うサッチモの映像が流れる。兵士たちの穏やかな顔、顔、顔…皆サッチモのジャズに魅せられ

ている。この日の参加者のみなさんも同じ思いだろう。

**入居した汚いアパートに泣いてしまった恵子さん
その時、破れた窓から飛び込んできたのがジャズ**

さて、ロサンゼルスで下船した夫妻は、地元ジャズファンと優雅な生活を味わったあと、ニューオリンズに入ったが、まずその貧しさに、いきなり驚かされる。

「だって、紹介されたアパートは汚くて、窓ガラスは破れ、ベッドはボロボロ…ゴキブリまで這い回っていて、私、泣いてしまいました」と恵子さん。

そんな時、破れた窓ガラスからジャズが飛び込んできた。「なんと、レンガ塀を隔てた裏側が、あの『プリザベーションホール』でした。そんな素晴らしい場所を提供してくれていたのです」。2人はプリザベーションホールに飛び込む。そこにはサッチモと同世代の、



まずは「ちぐさ」さんから金婚式おめでとう!の花束



伝説のジャズメン達に見守られてニューオリンズを語りジャズを演奏する外山夫妻

いやもっと先輩のジャズメンもいて本場のジャズをしっかりと学ぶことが出来た。2人は直ぐに地元で溶け込んでいき、地元も2人を温かく迎え入れてくれた。

ニューオリンズはジャズにあふれていた。教会

のゴスペルでスウィング、ブルースシンガー、ワークソング、何よりもジャズ葬式、終わってのセカンドライン…。日本から持ち込んだ大きなテープレコーダーを隠し持って、これらを録音していった夫妻。あとで再生してみると、「かつこいいなあ〜」という日本語が飛びだしてきた。もちろん録音していた外山さんの感動の一声。そんなテープも会場で披露された。「聴き取れましたか?」と外山さん。皆が大笑いして頷く。

このような環境の中からジャズが生まれてきたに違いない。それにしてもニューオリンズは貧しかった。「ジャズの

故郷というのに楽器も買えない人たちが少なくなかった。「楽器がなくても、皆さん身の回りのものは何でも“楽器”にしてしまったんです」と、例によって外山夫妻はビニール袋(当時は煙草のパラフィン紙)に櫛を入れて口に当て、見事にジャズを奏でてみせる。長野のコンサートでも、これを実演してみせたが「ええー!?!」といった驚きの表情で、後ろからのぞき込むジュニア・ジャズメンもいた。このほか洗濯板(ウォッシュボード)、ペットボトル、トランペットのミュートに利用した水詰まり補修用ゴムキャップ…など次々と紹介されていく。

第2部は、夫妻のデュオによる『南部の夕暮れ』『ハロー・ドリー！』で幕開け。次いでこんなエピソードが披露された。「アフリカでは太鼓が言語代わりの通信手段として使われていたので、アメリカでは一時、奴隷たちの奏でるドラムが禁止された時期もあったんです」と。これは初耳。

もう一つ、驚かされたこと。「ジャズはアドリブが命といわれていますが、それもそのはず。譜面など読めない(中には字も読めない)ジャズメンがいたので、間違っただけ演奏されることも少なくなかったんです。でも、それが音楽的に良ければいいのではないかと。それが“フェイク”と呼ばれ、アドリブの始まりとなったのです」という外山さんの解説。これも大納得。

ジャズ修行中に見た“銃と麻薬の町”の一面 帰国後 “銃に代えて楽器を！”活動始める

そんな夫妻のニューオリンズでのジャズ修行で目の当たりにしたのが、“銃と麻薬の町”という一面。少年時代に銃を発砲して少年院に送られ、トランペットと出会って偉大な人生を送るようになったサッチモの面影が2人の頭をよぎる。後年サッチモがアフリカを訪れ、子供たちにトランペットを寄贈したことも、鮮やかに甦ってきた。「そうだ、私たちもニューオリンズの子供たちに楽器を贈ってあげよう」。それが帰国後、“銃に代えて楽器を！”のスローガンのもと、日本ルイ・アームストロング協会(ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF)を発足される原点と

なった。

ニューオリンズへの寄贈楽器は、すでに830点を超えている。2005年に同地を襲って壊滅的な被害をもたらしたハリケーン・カトリナからの復興支援には、日本のファンからの1000万円を超える義援金とプロのミュージシャンらも含めて60点の楽器も贈られた。「今度は私たちがお返しをする番」と2011年3月の東日本大震災では、イの一番にニューオリンズから支援の手がさしのべられ、津波で楽器などすべてを失った宮城・気仙沼のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」にWJFを通じてすべ



ての楽器が補充されている。被災後1ヵ月半ほどしてこれらの楽器を手にした「ドルフィンズ」が、総合避難所の前で感動的なコンサートに参加した際、夫妻も現地に飛んで子供たちと共演、激励している。

そして、2012年10月、今度はニューオリンズから高校生ら16人によるジュニアバンドが訪日(総勢21人)、仙台、多賀城、気仙沼、石巻…と東北の被災地を廻って各地のジュニアバンドと交流するという夫妻の夢も実現した。

「そんな時、ふと考えたのが、ドルフィンズをニューオリンズに連れて行って、日米被災地同士の子供たちの交流ができないものだろうか…。まさかとは思っていたが、夢は膨らむいっぱい。なんと当時の駐日アメリカ大使、ジョン・ルーズさんがツイッターでこの活動を紹介してくれて、国際交流基金も動き実現へと動き出した。まさにDreams Come True. ですね。2013年8月、サッチモ・サマーフ

ェストの晴れの舞台上でニューオリンズのファンの盛大な喝采のなか熱演したドルフィンズに熱い視線を送る夫妻。

そんな心温まる「夫婦でジャズ50年」が、映像を交えて夫妻の口から淡々と語られ、集まった25人(喫茶店という会場の関係もあってごく少数に絞られてしまったが)の皆さん、静かに熱心に聞き入っていた。再び夫妻のデュオによる『主よ、御許へ』と『聖者の行進』で1回目



の幕を閉じた。

ここ、ジャズ喫茶ちぐさ(前ページ下段の写真)は2階が創業者を顕彰した「吉田衛記念館」になっていて、オリジナルの店舗を約7割程度にリサイズし、復元した空間に創業者・吉田衛とちぐさまつわる貴重な写真、レコード、その他資料が展示されている。見学は無料。終演後、覗いてみたが、なかなか素敵なジャズ展示スペースとなっていた。

ジャズの秘話も次々と紹介され、アカデミックに『サッチモが始めたジャズの事始 演奏技法編』

第2回は6月20日(月)午後2時開催。テーマは『サッチモが始めたジャズの事始 演奏技法編』。サッチモのずば抜けたテクニックを細かく分析していこうというもの。こんなことは、まあ外山さんでしかできないでしょうね。

この朝、恵子さんは体調を崩してしまったとかで、ちよっぴり遅れて会場入りしたが、待ちかねたファンから盛大な拍手で迎えられた。外山さんも、「一人でどうなるかと心配でした」と安堵のため息。

まずは、前回パソコンがフリーズしてしまって紹介できなかったサッチモの映像でスタート。映画『グレン・ミラー物語』や『五つの銅貨』など映画の名場面も紹介されたが、『ベニー・グッドマン物語』なども含めて、外山さん時代の若者をトリコにしてしまっ



た懐かしのジャズ…ついでジャズの歴史、サッチモ以前のアール・ハインズ、フレディー・ケパード、クレオールバンド、バンク・ジョンソンの演奏などが、恵子さんも加わって紹介される(写真上=右端は司会の山口誠之さん)。

そして、来年は始めてジャズが録音(1917年)されてから100年となるが、その記念すべき ODJB(オリジナル・デイクシーランド・ジャズ・バンド)について、この日、外山さんが興味深い話を披露してくれた。それはこの写真、新聞に掲載された ODJB の広告、“A brass band gone crazy”というキャッチコピー(前ページ上段の写真)。「ブラスバンドが狂っちゃった！」というんですね。これは当時、大変な反響を呼んだという。そのあたりのことはまた来年、「ジャズ誕生100年」で外山夫妻がユニークな企画を温めているので、まずはお楽しみに。さあ、サッチモの登場です。

ホット7の「シュガー・フット・ストンプ」…これは後にグレン・ミラーも、ベニー・グッドマンもまねて演奏しているんですって。そのサウンドも紹介される。グッドマンの「シング・

シング・シング」のもとになったフレッチャー・ヘンダーソンの「クリストファー・コロンブス」もあわせて紹介される。

普段のコンサートでは、あまり聴くことの出来ないジャズの秘話が次々と紹介されていく。外山夫妻ならではの、いや「ちぐさ」ならではの素晴らしい企画。

第2部は、若き日のサッチモ、「シャイン」の映像で始まり、夫妻の演奏が後を追う。ジャズを作ったサッチモの曲が次々と飛び出す。「ストラッティン・ウィズ・サム・バーベキュー」「ポテト・ヘッド・ブルース」「マンデー・メイク・アップ・マイ・マインド」「チャイナタウン・マイ・チャイナタウン」…いろいろな曲を聴かせて、その中のサッチモ独特の高度なテクニックを次々と紹介していく。いやあ、これはなかなかアカデミックでもあり、会場をぎっしり埋めたファンが25人というのは実にもったいなかったなあ。テレビ番組などでじっくり聴かせて貰いたいテクニックなのだ。

おや、テレビといえば、こんなものも映し出された。

後の例会でも紹介された外山さんと長男の洋一さんが

デュエットした『デキシー・ワンダーランド』で締めくくられた。いや、時刻はすでに午後4時を回っていたが、さらに時間を延長してジャズ夫妻50年の活動の様子がコンパクトに紹介された。既に830点を超えた楽器の寄贈、ハリケーン被災地への支援活動、

東日本大震災被災地へのニューオリンズからの恩返し、ニューオリンズ高校生バンドの被災地訪問、日米ジュニアバンドの交流、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」の訪米…夫妻の活動はまだまだ続きますよ。

次回『サッチモが始めたジャズ事始 スキャット編』さらに第4回、まだまだ続きます！ 予約受付中！

第3回は7月25日、『サッチモが始めたジャズ事始 スキャット編』へと続き、最終第4回は8月31日(水)、場所を変えて「ちぐさ」のすぐお隣さんのイベントホール「HANA HANA(ハナハナ)」で今回の講座の総集編として秘蔵映画の上映と解説、タイトルは『おめでとう50年!! ありがとうサッチモ!!』 時間はいずれも午後2~4時。セインツも特別出演して、びっくりパーティーになりそう。募集人員80人 受講料3000円(ドリンク付き)。ご予約は「ちぐさ」(月~金 午後、電話045-315-2006)へ。 (小泉良夫)

ニューオリンズのリズムに酔いしれた 「NAGANO門前ジャズストリート」

2016年5月28日(土)、夕刻4時30分、2016年度NAGANO門前ジャズのメインゲスト・外山喜雄とデキシーセインツ(写真②)がステージに登場。昨年のステージに興奮/感動した長野のファンたちで客席は立ち見も含めて満杯の盛況である。

最初のステージは外山喜雄さんによるジャズクリニック(写真③)、高校生を中心とした・ビッグバンド”The Big Band of Music Toys”のメンバーが受講生として、ニューオリンズで始まったジャズのエッセンスを、まずは教会での賛美歌がジャズになる過程として“Amen”のコール&レスポンスで指導。声とノリのよいテナーサックスの高校生が外山さんから「いい声だね」と褒められ、会場から大きな拍手を受ける。

続いて、貧しい黒人たちが、身近にあるものを楽器として使っていた‘ジャグバンド’のデモンストレーション。櫛に薄紙をまいたカズーやウォッシュボード(洗濯板)の登場に、長野のジャズファン、子供たちも大喜び。「ウォッシュボードは、ドラムの少年(中学2年生)に手伝ってもらいましょう」とその場で呼びかけ、生まれて初めて“洗濯板”を手にしたドラム少年は興味津々の様子。ハモニカ、縦笛も加わって、ドラム少年のノリノリの熱演に、会場は大盛り上がり。続いてニューオリンズでジャズ葬式の帰りに演奏される“セカンド・ライン”を教材に、演奏を通してジャズのリズム感を具体的に学んでいく。「ニューオリンズでは、お葬式が大人気なのです。埋葬に行くときは切なく厳かな演奏で、墓地からの帰りは陽気でリズムカルな演奏となります」という解説、そして最初のファンファーレに続く掛け声「イエーッ！！」に客席も

立ち上がって、客席、ステージ一体となり、のっけからニューオリンズのノリになる。”The Big Band of Music Toys”のメンバーも演奏に参加、会場を大ノリでセカンド・ライン行進。もちろんドラム少年のウォッシュボードも素晴らしいノリ。客席からは「新しいスターが誕生した！」と盛大な拍手が

贈られた。

続いての外山喜雄とデキシーセインツのステージが始まる際、司会の武田徹氏(門前ジャズ総合プロデューサー、早稲田大学ニューオリンズ・ジャズクラブ出身)から、「外山喜雄・恵子ご夫妻は今年金婚式を迎えられます」との紹介にWJF、小泉良夫理事夫妻より、ステージの外山恵子さんに金婚式お祝いの記念品のワイン(サプライズ!)が手渡され、客席から大きな拍手が贈られた。

約30分間のジャズクリニックで客席はすっかりニューオリンズのジャズムードに浸かり、セインツのステージに手拍子、足拍子、掛け声とステージ客席が一体となった楽しさいっぱいのライブとなった。フィナーレは“聖者の行進”でバンドが会場内をパレード、Music Toysのメンバーや傘を持った観客たちのセカンド・ラインの列が会場の通路を埋め尽くした。

<デキシーセインツ演奏曲目>

『ハロー・ドーリー!』、『ハインサエティー』、『スイングしなけりや意味がない』、『A列車で行こう』、『世界は日の出を待っている』、『聖者の行進』

ニューオリンズ・ジャズの楽しさを今年もNAGANO門前ジャズストリートで堪能できたヨロコビで夕闇せまる長野門前ジャズ会場はジャズの余韻に酔いしれていた。

(山口義憲)

(写真①は、右から筆者の山口義憲さん、総合プロデューサーで司会の武田徹さん、信越放送の若手アナ)



**蓼科高原・標高1700m! ライブ
観客20数人、演奏曲目20曲!**

「NAGANO 門前ジャズストリート」の翌29日(日)は蓼科高原へ。標高1700mにあるペンション「ピタラス2」(長野・茅野市北山)での「ライブコンサート」。

ライブの会場となったペンションのイベントホールは、飲食物の持ち込み、何でもOK!とあって、10ほどある丸テーブルには、開演前、どこもすでに手作りのお料理が山積みされていた。枝豆も山盛り。ウイスキーや酒瓶も所狭しと。20人ほど(何せペンションなのでこれぐらいが限度か?)の参加者の皆さんが三々五々ホール集まってきて、盛り上がってくる。水道の水は高原のミネラルウォーターとあって、ウイスキーの水割りが美味しそう。

午後3時開演。「こんな(標高の)高いところで演奏するのは初めてです」と外山さん。ここでも『南部の夕暮れ』で幕を開ける。午後4時までの第1部は『マック・ザ、ナイフ』、『ロシアの子守歌』、『ケイコズ・ブギ』、『A列車で行こう』など7曲を熱演。

休憩が30分もあって、夫妻はテーブルを廻るのに忙しい。あとで伺ったのですが、参加者の中には、外山夫妻と早稲田ニューオールリンズジャズクラブの同期生でグループも組んでいたという方やら、美ヶ原でかつて開催されたジャズフェスティバルの関係者の皆さんとご家族とか…

皆さん、夫妻と親交のある旧知の方々ばかりで盛り上がりやすいはずはありません。

4時半、『セントルイス・ブルース』に始まり、恵子さんのバンジョーをフィーチャーした『スワニー河』、『世界は日の出を待っている』。NAGANO 門前ジャズストリートで大受けした『イエーメン! (amen)』の手拍子も加えた大合唱。例の日用品など集めた“ジャグバンド”、『星に願いを』などディズニー・シリーズ、フィナーレの『聖者の行進』では、ほ



ぼ全員が傘やら、善光寺の御柱祭で使われた“おんべ”(短い棒の先に房飾りが付いている)を振り振りホールを廻る。ステージ前の狭いスペースは、そりやもう大騒ぎ! やっと終わると、今度はアンコール! の大合唱。いつもですと『聖者の行進』ですんなり終わるんですけどねえ。で、でました『ブルーベリー・ヒル』。2部は計13曲。何とこのライブでは計20曲も演奏された。セインツがそんなに数多く演奏したことってあったかなあ。

終演して、セインツ一行がお隣の同系ペンション「ピタラス」で素敵な欧風コースディナーを味わい、ホールに戻ってみると、お客さんはまだまだ大変な盛り上がり、外山さんも加わり高笑いがホールに響く。翌日伺うと「いやあ、12時半頃までやってしまいました」。

ペンションの女将さんによると、ここでは真夏でも、気温が25度Cを超える様なことはなく、冬はマイナス10度Cにもなるという。夏は登山、ハイキング、冬はスキーと四季折々賑わっているようだ。

(小泉良夫)

**外山夫妻、単独渡米「サッチモ・ジャズフェスト」へ
今年はそのジャクソン広場で公演**

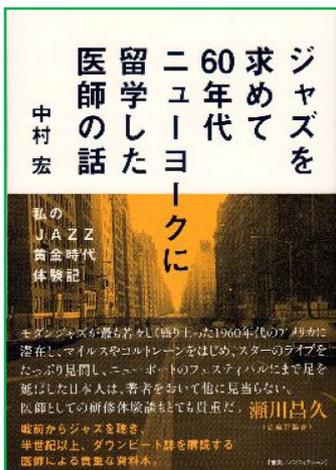


8月3日渡米、6日、ジャクソン・スクエアでのサッチモサマーフェスティバルに出演。
共演は、Thomas Fischer(cl)、Freddie Lonzo(tb, vo)
Richard Morten(b)、Gerald French(ds)

これは素晴らしい！と、称賛の書籍3点ご紹介

**中村宏さんがジャズファン必読の秀作！
各方面から絶賛の声相次ぐ**

日本レイ・アームストロング協会の“名誉会長”的存在の中村宏さん(ジャズ評論家、医学博士)が、このほど『**ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話**』(DU BOOKS)というジャズファン必読の秀作を上梓された。音楽評論家の瀬川昌久さんが推薦文に書かれているように、これはくモダンジャズが最も若々しく盛り上がった1960年代アメリカに滞在し、マイルスやコルトレーンをはじめ、スターのライブをたっぷり見聞し、ニューポートのフェスティバルにまで足を延ばした日本人は、著者をおいて他に見当たらない。医師としての研修体験談もとても貴重だ。



まさに「戦前からジャズジャズを聴き、半世紀以上、ダウンビート誌を購読する医師による貴重な資料本」といえる。

——目次——

- <第1章>戦争の記憶とジャズ・サウンド
- <第2章>ジャズと医学の学び舎、慶応大学
- <第3章>忘れられない油井正一先生との思い出
- <第4章>ジャズの本場に行きたい！
- 60年代ジャズ黄金時代のNYへ
- <第5章>1962年のニューヨーク
- <第6章>1966年、ふたたびアメリカへ
- <第7章>思い切り60年代のNYジャズを楽しむ
- <第8章>ジャズ祭、ジャズ同好会、ジャズファン
- <第9章>1960年代「ダウンビート」誌注目記事
- <第10章>極私的ジャズ交友録

私(小泉)が、ひょんなことから“編集”という大役を任されてしまうことになりました。ちょっぴり後悔もしていたのですが、出版社から送られてきた最初の中村宏先生からの原稿を拝読し、すっかりその面白さに魅せられてしまいました。「これは私が何としてもしっかり編集しないといけない」と、心に命じたわけです。

私がジャズに惚れ込んだ“あの時代”60年代が甦ってきました。驚きもいっぱいです。先生が師事された著名な医師のみなさん、霊長類のご研究。それがあの最高峰の科学誌「ネイチャー」誌にも掲載されたこと…興味津々でした。

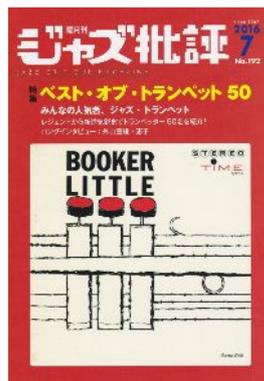
そんな中で先生にお願いしたのは、最終章<第10章>極私的ジャズ交友録一でした。いま、先生の周辺でジャズの活動をともに楽しんでおられる方々を紹介して頂きたかったのです。この本の出版趣旨とは、ちょっぴり異なるかも知れませんが、その結果、先生の周囲の、温かい人たちが、先生のご健筆で描かれてきたことに感動しました。WJ

Fの会員さんの1人は、「面白くて、一晩で一気に読ませていただきました」と絶賛していました。この本を読まれた方々は、みな感動されたに違いありません。

また、出版に当たってDU BOOKSの菊田有一専務、稲葉将樹編集長の両氏には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

7月24日(日)には、『中村宏さんの出版をお祝いする会』が催されますが、それは、また次号で詳報させていただきます。

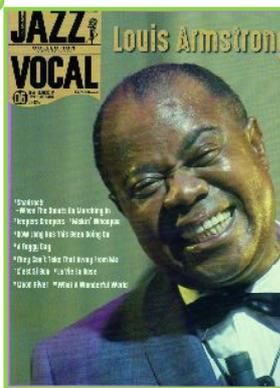
**「ジャズ批評」に外山夫妻の特集記事
「ベスト・オブ・トランペット50」にも選出**



例会の記事(4面)の中にもご紹介させていただいたが、「ジャズ批評」7月号(No.192)2016年6月24日発売「ベスト・オブ・トランペット50」に見開き2ページと『夫婦でジャズ、夫婦でサッチモ、夫婦でニューオリンズ50年(笑)』の7ページ、ロングインタビュー特集記事が掲載されています。再度ご紹介！



**ジャズ評論家、後藤雅洋さん監修CDマガジン
JAZZ VOCAL #5 ルイ・アームストロング発売中**



先日、60回特別例会にも、お見えになった、ジャズ評論家、後藤雅洋さん(四谷のジャズ喫茶イーグル店主)が、現在小学館で配本中のジャズシリーズを監修。このたび素晴らしい見識のジャズ評論「サッチモ号」を懇親会で紹介して下さった。熱意と愛の溢れる、素晴らしいルイ・アームストロングのボーカル特集です。

外山夫妻は、何度も何度も、記事をお読みになって、「本当に素晴らしい」と大感激。もちろんCDを聴いてみてサッチモの素晴らしさを、どなたも再発見することでしょう。

宮沢賢治ファンに告ぐ！ そして ジャズファンに！

仙台の佐々木孝夫さんから「宮沢賢治の作品にジャズの詩があるのをご存知か？」という素晴らしい情報が送られてきました。以下お知らせします。ちなみに、8月27日は賢治の生誕120年を迎えるそうです。

1926年(大正15年)の作品「ジャズ 夏のはなしです」(同人詩誌「銅鑼」七号に発表)がそれだ。銀河鉄道のモチーフとなっている岩手軽便鉄道がジャズのリズム?で描かれている。抜粋)...

シグナルもタブレットもあったもんでなく
とび乗りのできないやつは乗せないし
とび降りなんぞやれないやつは
もうどこまででも載せて行って
北国あたりで売りとばしたり.....

この詩を改稿した未発表作品に「岩手軽便鉄道7月(ジャズ)」というもある。抜粋)...

恋はやさし野べの花よ
一生わたくしかはりませんと
騎士の誓約強いベースで鳴りひびかうが
そいつもこいつもみんな地塊の夏の泡
いるかのやうに踊りながらはねあがりながら
もう積雲の焦げたトンネルも通り抜け
緑青を吐く松の林も
続々うしろへたんでしまっ
なほいっしんに野原をさしてかけおる.....

“賢治はジャズ・インプロヴァイザーのソロイストであり、リズムセクションは岩手軽便鉄道であり、伴奏者はイーハトーヴの風景であり、風であり、北上山地という風土だったのでは。”

「宮沢賢治、ジャズに出会う」奥成 達(著)より

米国のジャズシーンでは、カンザスシティジャズの隆盛期、カウント・ベイシーが1927年にカンザス・シティにやってきてベニー・モーテン楽団に入り、それがカウント・ベイシー楽団誕生の始まりとなる。また、1927年ホーギー・カーマイケルがああ「スターダスト」を作曲し、その後詞がつけられサッチモが歌ってヒットしたのが1931年である。「ジャズ 夏のはなしです」は1926年(大正15年)の作品。その時代に賢治はどこで、どんなふうにかと出会っていたのだろうか！

「ジャズ 夏のはなしです」

宮沢賢治とジャズ...意外な結びつきをどう捉えよう！

“宮沢賢治「ジャズ 夏のはなしです」を知ってもらいたい”キャンペーンTシャツを作りました。



～このキャンペーンに賛同していただける方に着てほしい～

古山 拓氏によるイラストTシャツ2種
ハニカムメッシュ仕様の着心地の良いTシャツです
黒地にプリント(左): LL, L, M, S 白地にプリント(右): LL, L, M, S 1着 2,500円(税込) + 送料250円 (サイズ数量が限られていますので希望に応じられない場合もあります)

申込みはメールで jmb@kih.biglobe.ne.jp

配布元・問合せ: JAZZ ME BLUES noLa

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-5-1ノーバルビル1F
022-398-6088

サー・チャールズ・トンプソンさん逝く

アメリカのジャズピアニストとして大変ユニークな存在であり、ジャズ評論家、大橋巨泉氏が、スウィングジャズとビーバップ、そしてモダンジャズの要素が混ざったそのジャズスタイルを中間派ジャズと名付けた、名ピアニスト、サー・チャールズ・トンプソンさんが、2016年6月16日、逝去されました。



1918年3月21日生まれ。享年98歳。

10代からプロ活動を始め、レスター・ヤングのバンドを皮切りに、バック・クレイトン、コールマン・ホーキンス等々ジャズ史を代表するミュージシャン達と共演、現存するビーバップ・エラ最後のプレイヤーだった。ゴルフも大変な腕前で、ニグロ・プロリーで活躍したこともある。

日本人の奥様、牧子トンプソンさんと結婚、1990年代、そして2002年以来、日本に住み、数年前までライブ活動も行ってた。

1950年代、ジャズストリートとして名高かったNY52丁目に出演していたサー・チャールズのピアノの音を聞いて、カウント・ベイシーの奥さんが「うちの主人は、今日は

仕事はないはず？」と不思議がったと言うほどベイシーと似た感覚を持ち、名盤として有名な『サー・チャールズ・トンプソン・ショーケース』を始め、

数々のジャズの名盤を残している。

1990年代、外山喜雄、恵子のグループとCDを残すほか、日本ルイ・アームストロング協会の例会コンサートにも数多く出演、外山喜雄、恵子夫妻と深い友情で結ばれていた。

外山夫妻からの情報を受けてワシントン・ポスト紙は6月20日付の電子面で、長文の追悼記事を載せている。

外山ご夫妻から「サー・チャールズ・トンプソンさんの、葬儀に行ってきました。教会での、本当に素敵なお葬儀でした！穏やかな、やさしい顔で、眠っていらっしやいました」とのコメントをいただきました。



**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

- ◆うつのみやジャズの街委員会会長、吉原郷之典様
スウィングハードオーケストラのコンサートで募って下さった募金を寄付頂きました 11万4782円
- ◆うつのみやジュニアジャズオーケストラ 4万9445円
- ◆萬成 修様(ドクター・デキシシーセインツ)ユーフォonium
ドクター・デキシシーセインツ、太田忠興様(賛助会員)からご連絡をいただきご寄付頂きました。

<6月17日夜、浦安三社祭の宵宮(入魂祭)で見かけたサッチモ手ぬぐい。こんな使い方もありました!!>



ささきようこさんは、浅草ハブ、新浦安ハブのフライダイナイト・ジャズの常連さんです!

外山様

4年に1度の祭でライブには行く事が出来ませんでした。が、昨年、頂いたサッチモ手ぬぐいを頭に巻いて、盛り上がって来ました。この手ぬぐい 結構、目立つらしいです(笑)。今日 明日、と 燃えまくって 来ます。

ささきようこ

外山夫妻 & デキシシーセインツの主な日程

- ◆7月30日(土)=軽井沢ジャズ・フェスティバル
- 31日(日)=横浜・旭ジャズまつり
- ◆8月19日(金)=銀座三越 Jazz NIGHTS for KIDS
- 24日(水)、25日(木)
=浅草ニューオリンズ・フェスティバル
- 31日(水)=夫婦でジャズ50年総集編
(横浜・HANAHANA)

50年でありました。(山)

第60回特別例会が開催され、外山喜雄・恵子夫妻のジャズにかけた50年の足跡を振り返る、心温まる例会でした。▼約50年前の1965年、早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ(ニューオリ)に入学し、4年生だった外山喜雄先輩、この年に卒業された(旧姓)大和田恵子先輩と出会いました▼1971年、6月のニューオリンズに半月間滞在し、外山夫妻の住むアパートに部屋を借りて、夢のようなニューオリンズ生活を体験することができました。私の青春でした▼ご夫妻が米国より帰国、有楽町の読売ホールでコンサートを開催した時、ニューオリOB会が全面的にサポート、私もキャッチフレーズ“夫婦二人でジャズ武者修行”と題したプレスリリースを作成し、朝日新聞に大きく記事として掲載されました▼その後、浦安の豚かつ屋で、サッチモとジャズにかける夢を度々伺いました。そして日本ルイ・アームストロング協会の設立、銃に代えて楽器を!の活動が始まり、そのお手伝いを22年間させていただいております。会報の編集、例会、サッチモ祭と外山夫妻を通してジャズに関わってきた

東日本台震災5年目の「復興 LIVE」

2016年9月11日(日)18:00~21:00 定禅寺ストリート・ジャズ・フェスティバル タイアップ・ステージ 東日本大震災から5年目の「復興 LIVE」が開催されます。

(会場)仙台市青葉区国分町にある通称「元鍛冶丁公園」内ステージ

(内容)震災後、支援先となった団体や震災をきっかけに結成されたグループなど関連のあるミュージシャンによる演奏を聞いていただくことで、改めてその活動を再認識し相互の絆を深める。また、コーナーを設け活動の紹介、支援先の受け入れ活動の紹介などを行う。

(主催)国分町街づくりプロジェクト (協力)みやぎ音楽支援ネットワーク、日本ルイ・アームストロング協会

(出演)石巻ジュニアジャズ、うつのみやジュニアジャズ、仙台で活動仙沼ミュージックストリート関連グループ、ジャンピング・クロウ、そして外山喜雄とデキシシーセインツなどを予定

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Googleで

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

編集長から

第60回特別例会が開催され、外山喜雄・恵子夫妻のジャズにかけた50年の足跡を振り返る、心温まる例会でした。▼約50年前の1965年、早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ(ニューオリ)に入学し、4年生だった外山喜雄先輩、この年に卒業された(旧姓)大和田恵子先輩と出会いました▼1971年、6月のニューオリンズに半月間滞在し、外山夫妻の住むアパートに部屋を借りて、夢のようなニューオリンズ生活を体験することができました。私の青春でした▼ご夫妻が米国より帰国、有楽町の読売ホールでコンサートを開催した時、ニューオリOB会が全面的にサポート、私もキャッチフレーズ“夫婦二人でジャズ武者修行”と題したプレスリリースを作成し、朝日新聞に大きく記事として掲載されました▼その後、浦安の豚かつ屋で、サッチモとジャズにかける夢を度々伺いました。そして日本ルイ・アームストロング協会の設立、銃に代えて楽器を!の活動が始まり、そのお手伝いを22年間させていただいております。会報の編集、例会、サッチモ祭と外山夫妻を通してジャズに関わってきた